

# 日本植物分類学会 ニュースレター

No. 11

Nov. 2003

## 目 次

井上健氏ご逝去のお知らせ .....	2
大会・講演会のご案内	
日本植物分類学会第3回大会および2004年度総会のご案内.....	3
2003年度日本植物分類学会講演会のご案内.....	8
お知らせ	
委員構成の変更について.....	9
国際植物命名規約(セントルイス規約)2000[日本語版]の発行の遅れについて.....	9
会費納入と自動振替利用のお願い.....	9
絶滅危惧種を刷り込んだタイル.....	10
書籍の著者割引のお知らせ .....	10
IAPT シンポジウム ニュース	
IAPTシンポジウム2004にクビツキー博士(ドイツ)が来る.....	11
2003年度野外研修会報告	
2003年度日本植物分類学会野外研修会実施報告.....	12
野外研修会に参加して .....	14
寄稿 I: 井上健さんがやり残した仕事 .....	15
寄稿 II: フィールド事故について	
I. サハリン海外調査と死亡事故.....	16
II. フィールドワークの心得.....	19
連絡員からときどき便り	
植物と人便り・1・.....	22
コケ便り・1・.....	23
会員消息.....	24

## 井上健博士ご逝去のお知らせ

---

会長 加藤雅啓

ご存知のことと存じますが(ニュースレター10号) 本学会会員・信州大学教授井上健博士には本年(2003)年7月28日、サハリンで現地調査中に不慮の事故のため逝去されました。井上博士は「サハリンにおける高山植物の多様性創出機構」に関する研究の共同研究者として、他の3名の研究者とともに7月21日にユジノサハリンスクに到着後、調査を続けてオハ近くに達しました。そこで湿地で調査中不運にも垂れ下がっていた高压電線に触れ感電死されました。調査に熱中する余りの事故であったと聞いていますが、野外では思いもかけないことが起こる可能性があるとはいえ、なぜ人が触れるような状態に危険な高压電線を放置していたのかと憤りを禁じ得ません。

井上博士はラン科の研究ならびに送粉をはじめとする花生物学の第一人者として広く知られ、学会でも活発に発表されて指導的立場で活躍されてきました。そればかりか、絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会の委員長として本学会の活動のために絶大なご尽力をいただいていた。本学会が2001年5月に設立された当初から、絶滅危惧植物専門第一委員会の委員長として重責を果たしてこられました。いうまでもなく、同委員会はわが国の野生植物の現状を調査する委員会で、本学会の中心的な組織です。博士にとって2期目にあたる2003年からは、移入生物の問題にも取り組むために活動の幅を広げられたところでした。加えて、本学会の前身の1つであった(旧)日本植物分類学会の時は植物分類学関連学会連絡会の担当幹事として、学会間の共同活動と交流促進に力を注いでこられ、ご努力が結局、2002年に日本分類学会連合が設立されるという形で実を結びました。このように井上博士はご研究で活躍されていただけでなく本学会の活動にも多大な貢献をされました。かけがえのない井上博士を失ったことで、学界ならびに本学会の損失は測りしれないものがあります。

多方面においてこれからのご活躍が期待されていた井上健博士を偲び、博士のご功績を我々の記憶に永くとどめるために、本学会編集委員会では和文誌「分類」において博士を追悼することを企画しています。

改めて、故井上健博士に対し謹んで哀悼の意を表します。

## 大会・講演会のご案内

### 日本植物分類学会第3回大会および2004年度総会のご案内

日本植物分類学会第3回大会準備委員会

日本植物分類学会第3回大会を以下のように開催いたします。

#### 【会場】

広島大学大学院理学研究科E棟（発表会場・総会）・広島大学生協北1店（懇親会）

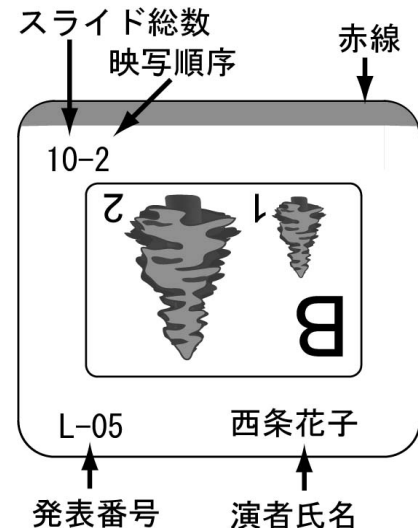
#### 【日程】

- 3月13日(土)【14:00-17:00】 公開シンポジウム  
 【17:30-】 評議員会
- 3月14日(日)【09:30-11:30】 口頭発表  
 【12:30-13:30】 総会  
 【13:30-14:20】 記念講演  
 【14:20-17:00】 ポスターセッション  
 【17:30-19:30】 懇親会
- 3月15日(月)【09:00-12:00】 口頭発表  
 【13:00-15:00頃】口頭発表

#### 【発表の要領】

**一般講演** 時間は、講演12分、質疑応答3分の計15分です。デジタルプロジェクター、35mmスライド映写機およびOHPを用意いたします。発表・参加申込書に希望する発表媒体を記入してください。

- ・デジタルプロジェクター：Windows XP と Macintosh ( Mac OS X ) のパソコンを用意いたします。Microsoft PowerPoint でファイルを作成し、CD-R または CR-RW に焼き付けたものを、大会前の3月8日(月)までに大会準備委員会宛に郵送してください。送られたファイルは発表順にハードディスクにコピーし、動作確認をいたします。当日の操作は発表者自身で行っていただきます。卓上に用意したパソコンのマウスまたはカーソルキーで操作してください。Microsoft PowerPoint は、Windows 版では ver. 2000, Macintosh 版では v. X を使用します。複雑なアニメーションなどは表示に時間がかかることがあるため、なるべく避けるようにご協力願います。当日のファイル受付はいたしません。念のため PowerPoint ファイルを OHP シートに出力してご持参ください。
- ・35mm スライド：スライドには「発表番号」「演者氏名」「スライド総枚数-映写順序」を記入し、プロジェクターにセットする際に上になる縁に赤線を引いてください。スライド映写は係員が行います。



**ポスター** ポスター発表用のパネルの有効面は横 83cm、縦 164cm です。左上角に講演番号を貼るための余白 (10x10cm) を残してください。参加受付が終了次第、ポスター会場 (理学研究科 E 棟) にてポスターを掲示してください。掲示の際に使用するセロハンテープなどはこちらで準備します。画鋏は使えません。3月14日午後の記念講演後にポスターセッションを行います。なお、今大会では昨年の神戸大会と同様に、ポスターセッションの時間をより多く確保するため、ポスターフラッシュは行いませんので、あらかじめご了承ください。

#### 【大会参加費 (講演要旨代を含む)】

1月16日までに申込の場合	3,000円 (一般), 1,000円 (学生)
1月17日以降と当日申込の場合	4,000円 (一般), 1,000円 (学生)
要旨集のみの別売価格	1,000円

#### 【懇親会】

3月14日 (日) 午後5時30分より、広島大学生協北1店で行います。ふるって御参加ください。

1月16日までに申込の場合	4,000円 (一般), 3,000円 (学生)
1月17日以降と当日申込の場合	5,000円 (一般), 3,500円 (学生)

#### 【昼食】

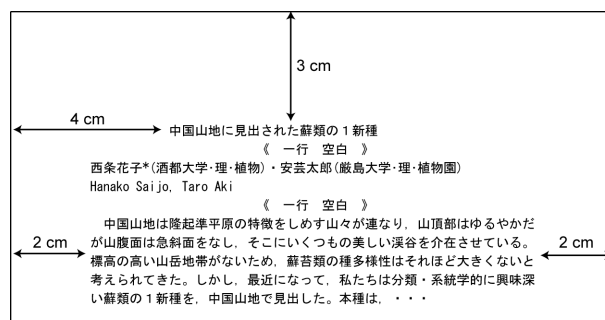
3月13日 (土) は隣接する生協北1店の食堂 (徒歩3分、当日営業する生協の店舗が変わる可能性もありますが、少なくとも学内のどこかの食堂は営業します) をご利用になれますが、3月14日 (日) はキャンパスの食堂は営業しておりません。ご希望の方に弁当 (800円) をご用意いたしますので、発表・参加申込書に希望日を記入し、大会参加費・懇親会費とともに所定の費用を払い込みください。大学周辺には食堂がありません。

#### 【参加申込方法】

できる限り電子メールにて発表・参加申込をしていただくようお願いします。別紙の「発表・参加申込書」にしたがって必要事項を記入し、koke@hiroshima-u.ac.jp まで送信してください (添付書類にしないでください)。送信してから3日経っても (土日・祝日を除く) こちらから受信の返事がない場合は、タイトルに「再送信」と記入の上、同じメールを送信してください。電子メールをご利用できない方は、別紙の「発表・参加申込書」に必要事項を記入の上、大会準備委員会事務局まで郵送またはファックスしてください。

#### 【要旨】

本大会では指定の用紙を同封していません。凡例に従って、A4判の用紙1枚に文字サイズ12ポイント以上でタイプしてください。発表題目の左には発表番号を印刷するための余白が必要です。発表題目、発表者氏名と所属、発表者氏名 (英語)、要旨の順に記入し、実際に発表する演者の



右肩に「\*」を入れてください。図や表を入れることは可能ですが、グレイスケール(ハーフトーン)原稿は印刷の際つぶれてしまうおそれがありますのでご注意ください。要旨はそのままB5サイズに縮小して印刷・製本いたします。原稿はプリントアウトしたものを大会準備委員会事務局あてに郵便でお送りください(1月30日必着)。電子メールまたはファックスによる送付は受け付けませんので、ご注意ください。

#### 【申込の締め切り】

発表・参加申込 1月16日必着(電子メール, 郵便またはFAX)

発表要旨原稿 1月30日必着(郵便のみ)

大会参加費・懇親会費等振込 3月1日まで(1月17日以降振込の場合は金額が異なります)

発表用 PowerPoint ファイル(CD-RまたはCD-RW) 3月8日必着

#### 【要旨原稿の送付先】

〒739-8526 東広島市鏡山1-3-1

広島大学大学院理学研究科生物科学専攻

日本植物分類学会第3回大会準備委員会

FAX: 0824-24-7452

#### 【参加費送金先】

口座名義: 日本植物分類学会第3回大会準備委員会

郵便振替口座番号: 01390-5-7662

#### 【宿泊施設】

広島大学周辺の宿泊施設は限られています。おもなホテル・旅館は次のとおりです。下記の客室料金は税込みですが、変更になる場合があります。予約は各自でお願いいたします。また、広島市の広島駅周辺にはたくさんの宿泊施設がありますので、広島市内での宿泊もおすすすめします。JR広島駅から西条駅までは電車で33分(570円)、広島市中心部にあるバスセンターから広島大学までは高速バスで60分(800円)です。大学までのアクセスについては、下記を参照してください。

国民年金健康保養センターひがし広島(広大北口バス停より徒歩5分)

シングル6,121円(一泊朝食付) ツイン11,550円(一泊朝食付)

〒739-0047 広島県東広島市西条下見6-5-45 TEL: 0824-22-8211

西条イン(西条駅より徒歩1分)

シングル5,600円(一泊朝食付) ツイン9,200円(一泊朝食付)

〒739-0011 東広島市西条本町2-2 TEL: 0824-22-2277

東広島シティホテル(西条駅より徒歩5分)

シングル6,750円(一泊朝食付) ツイン11,500円~(一泊朝食付)

〒739-0016 東広島市西条岡町10-20 TEL: 0824-22-8686

藤乃屋旅館(西条駅より徒歩6分)

和室一泊二食15,750円~ (詳細は旅館にお問い合わせください)

〒739-0011 東広島市西条本町12-3 TEL: 0824-23-2423

ホテルサンライズ21(西条駅より徒歩8分)

シングル6,000円(一泊朝食付)

〒739-0014 東広島市西条昭和町5-10 TEL: 0824-31-3232

ホテルイーグル（西条駅よりタクシー 3 分）

シングル 5,560 円（一泊朝食付） ツイン 9,640 円（一泊朝食付）

〒 739-0005 東広島市西条大坪町 2-13 TEL: 0824-22-5590

HOTEL KAMO（西条駅よりタクシー 10 分）

シングル 5,040 円～（一泊朝食付） ツイン 11,550 円～（一泊朝食付）

〒 739-0024 東広島市西条町御園宇 6184 TEL: 0824-22-1101

西条グランドホテル（西条駅よりタクシー 15 分）

シングル 6,090 円（一泊朝食付） ツイン 10,080 円（一泊朝食付）

〒 739-0023 東広島市西条町下三永 730 TEL: 0824-26-0721

### 【会場までのアクセス】

ＪＲ山陽本線を利用する場合　　ＪＲ西条駅前からバス「広島大学」行に乗り、「広大中央口」バス停（下図参照）で下車します。約 15 分、280 円です。なお、このバスはキャンパス外周を循環して西条駅に戻ります。西条駅方面へお帰りの際は、下車した同じバス停からお乗りください。タクシー利用の場合は、約 10 分、約 2,000 円です。

山陽新幹線を利用する場合　　新幹線東広島駅前からタクシーで約 15 分、約 2,000 円です。広島大学行きのバス（広大中央口下車）は、平日の午前中に 3 便（約 15 分、370 円）のみです。新幹線を利用する場合は、広島駅まで行き、ＪＲ山陽本線に乗り換えて西条駅まで来られる方が早い場合もあります。

広島空港を利用する場合　　ＪＲ白市駅までバス（約 15 分、380 円）で行き、そこからＪＲ山陽本線で西条駅（8 分、190 円）まで来ます。空港から直接大学までタクシーを利用される場合は、約 40 分、約 6,000 円です。

山陽自動車道を利用する場合　　大阪方面からは「東広島」、福岡方面からは「志和」インターチェンジで下り、約 20 分です。理学部前、法学部前の駐車場をご利用ください。土・日の日中（6:00-21:00）はどのゲートも開いていますが、それ以外の時間帯および月曜日に大学へ来られる場合は、警備員が駐在している 1 番ゲート（下図参照）から入構してください。

### 【大会に関する問い合わせおよび連絡先】

〒 739-8526 東広島市鏡山 1-3-1

広島大学大学院理学研究科生物科学専攻

日本植物分類学会第 3 回大会準備委員会

電話：9824-24-7404（山口富美夫）ファックス：0824-24-7452

電子メール：koke@hiroshima-u.ac.jp

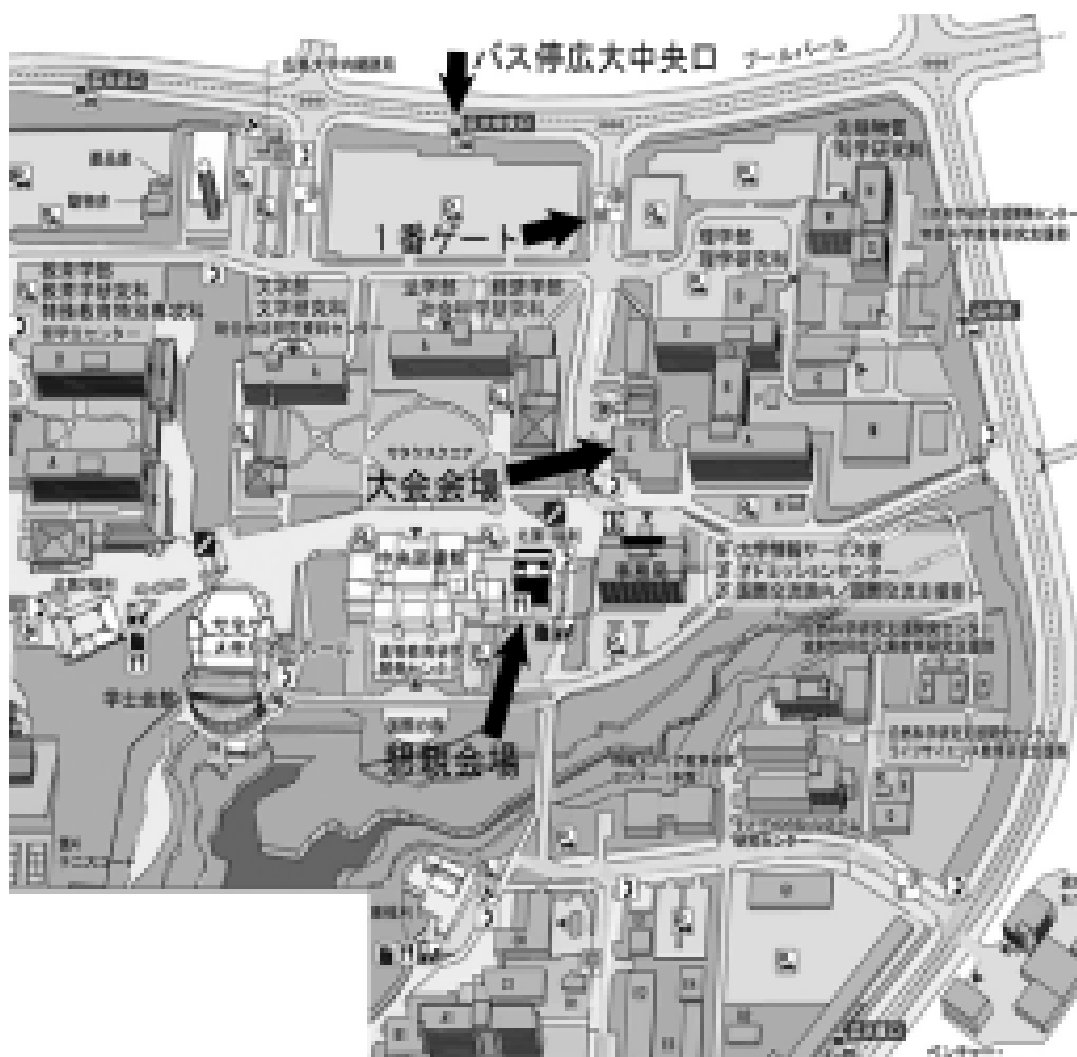
なお、大会に関する案内や最新情報は以下のホームページでご覧になれます。

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/koke/>





(大学周辺)



# 2003 年度日本植物分類学会講演会のご案内

講演会担当委員 福岡誠行

今年度の講演会は、次の通り開催する予定です。お誘い合わせのうえ、ぜひご参加ください。

【会場】 頌栄短期大学保育科

【日時】 2003 年 12 月 14 日 (日) 10 時 30 分から

【演題】 兵庫県の植物相について

【プログラム】

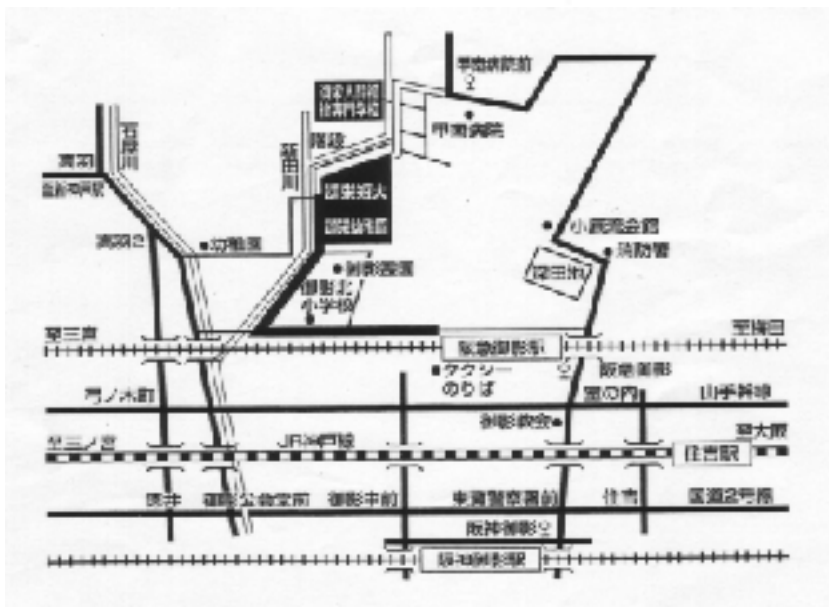
- 10:30 ~ : 三宅慎也 (神戸市立森林植物園)  
「六甲山の植物」
- 11:30 ~ : 高橋晃 (兵庫県立人と自然の博物館)  
「溜池 (西脇市) 周辺にみられる植物の今と昔」
- 12:15 ~ : 昼食
- 13:00 ~ : 小林禎樹 (兵庫県立健康環境科学研究所)  
「兵庫県産テンナンショウ属」
- 14:00 ~ : 黒崎史平 (頌栄短期大学)  
「兵庫県レッドデータブック (植物相)」
- 14:45 ~ : コーヒー・ブレイク
- 15:00 ~ : 北川尚史 (京都産業大学)  
「ヒメジャゴケについて」

【懇親会】 講演終了後、頌栄短大にて懇親会を予定しています。

【昼食】 昼食は近辺にありません。当日 (11 時まで) 予約承ります。

【問い合わせおよび連絡先】

神戸市東灘区御影山手 1  
頌栄短期大学 福岡誠行、黒崎史平  
電話 : 078-842-2541 (代表)





## お知らせ

---

### 委員構成の変更について

---

庶務幹事 遊川知久

絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会の委員構成についてお知らせします。井上健委員長の急逝に伴い、後任を九州大学の矢原徹一氏にお願いしました。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

### 国際植物命名規約（セントルイス規約）2000 [日本語版] の発行の遅れについて

---

国際植物命名規約邦訳委員会副委員長 永益英敏

今年のニュースレター5月号で、国際植物命名規約（セントルイス規約）2000 [日本語版] を9月発行予定としておりましたが、諸般の事情により発行がたいへん遅れてしまいました。予約をいただいた皆さまにはご迷惑をおかけしておりますことを深くおわび申し上げます。この記事を書いている11月初めにはすでに印刷所に原稿が渡っておりますが、上製本のため納入は早くても11月末になりそうです。納入次第、直ちに発送にかかりますので、もうしばらくお待ちください。発行の遅れが確実にになっていたにも関わらず、ニュースレター8月号でも9月発行予定のままにして予約を募ったため、多くの皆さまにご心配をおかけすることになってしまいました。このニュースレターがお手もとに届くころには「命名規約」がすでに届いていることを期待しております。

### 会費納入と自動振替利用のお願い

---

会計幹事 横山潤

本学会の会費は前納制で、一般会員 5,000 円、学生会員 3,000 円、団体会員 8,000 円です。納入状況はニュースレター送付の際の宛名書きの右下に「納済会費：数字」という形で示してあります（2002 年度から自動振替制度をご利用の方は、数字の代わりに「自動振替」と記入されています）。この数字が2003 未満の方は、以下の郵便振替口座にお早めに納入いただきますよう、よろしくお願い致します。

口座番号：00120 - 9 - 41247

名 義：日本植物分類学会

ご承知のように昨年度より会費納入に自動振替をご利用頂けるようになっております。会計事務削減のため、なるべく本制度をご利用頂きますよう、よろしくお願い致します。ご希望の方は、自動振替依頼書にご記入・ご捺印の上、随時会計幹事にお送り下さい（ただし2003年度の会費引き落とし手続きは終了しておりますので、ご利用は2004年度からになります）。

依頼書をご希望の方は会計幹事までお問い合わせ下さい。

異動をされた会員の方は、新住所をお忘れなく会計幹事宛にお知らせ下さい。その他、会費納入に関するご質問、納入状況のご照会など、随時承っておりますので、お気軽にお知らせ下さい。会計幹事の連絡先は、ニュースレター巻末をご参照下さい。

## 絶滅危惧種を刷り込んだタイル

兵庫県立人と自然の博物館 岩槻邦男

一見商品の売り込みのように見えますが、最近の企業関係者の環境問題への取り組みの一例を紹介いたします。

岡崎在住の企業のオーナーが、環境 NPO を立ち上げ、その事業の一つとして、大手のタイル会社に委託して、絶滅危惧植物を刷り込んだタイルをつくっています。特殊な製品で、数が少ないですから割高になりますが、このような製品があると知れば関心をもってくれる人もあるようです。

デザインに使われているのはサクラソウ、サギソウ、キキョウ、フクジュソウの4種、サイズは149 × 249、99 × 249、149 × 149、99 × 99の4種類です。サイズによって、図柄は少しずつ違っています。価格は、大きいものから順に3,800円、3,200円、2,800円、2,200円です。

絶滅危惧種を大切にしようという気運をさらに広げるために、施設などにこのようなタイルが使われることを期待したいと思います。植物分類学会として、この種の活動が活発であることを期待してよいと思います。もし広報に協力してもらえらば、パンフレットもつくられています。ご照会下さい。

関心をお持ちいただければ、直接東京南青山にある「(株)コンフォートメディア」(phone 03-3406-1220; fax03-3406-1050へご連絡いただければ案内があると思います。環境 NPO として活動しているところで、儲けを期待した商売をしているところではありませんので、多少硬い対応になることがあるかもしれませんが、それは予めお断りしておきます。

ついでに一言触れておきますが、種の選定やデザインなどの相談に協力しましたので、そのため売り上げの一部をコミッションとして提供して下さることになっており、すでに一部を日本植物分類学会に寄付していただいております。たくさん販売されれば、分類学会の経理にもプラスになります。

## 書籍の著者割引のお知らせ

ニュースレター編集幹事 西田佐知子

堀田満氏が、「イモとヒト」という根栽農耕に関するとても充実した本の著者割引をして下さることになりました。2割引とお得になっております。ぜひこの機会をご利用ください。

イモとヒト 吉田集而・堀田満・印東道子(編集). 362ページ. 平凡社. 本体価格5,500円(税別)(著者割引はこれより2割引。)

申込方法 Eメールを使っている方

1. Eメールのタイトルに、「イモとヒト」と書いてください。
2. Eメールの本文に、希望する部数・希望者の名前・郵便番号と住所(送り先)・電話番号・Eメールアドレスを書いてください。
3. 上記のEメールを、Mitsuru.Hotta@mb9.seikyoku.ne.jp に送ってください。

申込方法 Eメールを使っていない方

希望する書物名・希望部数・希望者の名前・郵便番号と住所・電話番号(あればファックス番号)を書いて、下記までファックスか郵便で送ってください。

〒464-8601 名古屋市千種区不老町 名古屋大学博物館 西田佐知子 (fax: 052-789-5896)

## IAPT シンポジウム ニュース

### IAPT シンポジウム 2004 にクビツキー博士 (ドイツ) が来る

IAPT シンポジウム 2004 準備委員会 田村実

ドイツ・ハンブルグ大学で教授を永年勤められ、世界的に有名なクラウス・クビツキー (Klaus Kubitzki) 博士が IAPT シンポジウム 2004 に来られて、「アジアの植物の分子系統 (Molecular phylogeny of Asian plants)」のセッションで話をされます。話のタイトルは、「緑色陸上植物の進化における主要な革新 (Key innovations in the evolution of green land plants)」です。

クビツキー博士は Springer 社から続々と出版されている「The Families and Genera of Vascular Plants」を編集されていることで特に有名です。この本はいわゆる維管束植物の百科事典で、形態学、解剖学、発生学、核学、生態学、生化学、分子系統学などの知見が集積されており、いろいろな分類群で分子系統が出揃った後を見据えた名著です。

この多岐にわたる本を編集しておられることから理解できるように、クビツキー博士の研究は実に多岐にわたっています。学位 (Habilitation) のテーマは「Untersuchungen über die systematische Gliederung und den Ursprung der Hernandiaceen」で、ハスノハギリ科のモノグラフですが、その後、植生、花粉、化学分類について精力的に研究されています。特に化学分類の研究は有名で、「Chemosystematische Betrachtungen zur Großgliederung der Dicotylen. Taxon 18: 360-368 (1969)」や「Phytochemical aspects of angiosperm origin and evolution. Acta Bot. Neerl. 22: 457-468 (1984) (ゴットリーブ博士との共著)」はよく引用されています。南米の植生調査も熱心に行われ、「Amazon lowland and Guayana highland. Historical and ecological aspects of their floristic development. Revista Acad. Colomb. Ci. Exact. 17 (65): 271-276 (1989)」は大変おもしろい論文です。

私は2年間クビツキー博士の下で学ばせて頂きましたが、クビツキー博士はとにかくアクティブかつスピーディーで迫力ある研究者である一方、面倒見がよく優しい紳士です。多くの若き研究者にクビツキー博士の話を聞いて頂いて、分類学において視野の広さがいかに大切かを学んで頂ければ幸いです。

## 野外研修会報告

### 2003 年度日本植物分類学会野外研修会実施報告

徳島県立博物館 小川 誠

2003年度の野外研修会は「ナカガワノギクが咲く溪流とシオギクの咲く海岸の散策」と題して2003年11月8日～9日に徳島県で開催されました。私はその世話役をしましたので、その実施報告をいたします。

研修会を依頼されてからまず悩んだのは、今年の宮崎が「新方式の野外研修会」と評されたように、たいへん立派だったことです。私の秋の予定はすでに詰まっていて、研修会やその準備に割ける時間はごくわずかで、宮崎方式の採用は断念しなければなりません。小じんまりとはしていますが、徳島のフロラの良さの一端を見ていただき、また来ていただけるような会にしたいと考えました。本州四国連絡橋の神戸・鳴門ルートができてから、特に関西から徳島への交通は便利になりました。関西へ行く高速バスは15分に1本と頻繁に出ており、私が博物館から自宅へ帰るバス（1～2時間に1本）とは比べものにならない多さです。徳島の植物についてはまだまだ知られていないことも多く、この機会に興味を持って再度訪れていただければ、新たな分類学的な知見の蓄積につながることを期待しながら研修会を企画しました。

研修会の内容については、徳島県には西日本で二番目に高い山である剣山から県南部の黒潮に面した暖かい気候までといった変化に富んだ素晴らしい自然があります。また、野生では絶滅したナルトオウギやコブシモドキ、他県ではなかなか見ることのできないワタヨモギやソハヤキミズなどの珍しい植物もたくさんあります。とても1日では周りきれませんので、ナカガワノギクとシオギクという2つのキク属に絞ることにしました。

徳島県立博物館では、故阿部近一氏が出版された「徳島県植物誌」の証拠標本である阿部コレクションの寄贈を受け、整理しています。その標本を見ていると、阿部氏が県内外の研究者とコンタクトを取りながら、また県内外に採集に行かれてたくさんの標本を集めた姿がひしひしと伝わって来ます。そして、植物誌をまとめられた以後もたくさんの課題を阿部氏が抱えていたことを知ることができます。今では阿部氏の話がうかがうことはできませんが、阿部コレクションなどの標本を見ながら、徳島県の植物研究者が集まって「みどりくらぶ」という徳島県のフロラに関する勉強会を月に1度博物館で開催し、阿部氏のやり残した課題を検討しています。今回の研修会では「みどりくらぶ」の会員の皆様に現地案内を手伝っていただきました。また、「みどりくらぶ」の会員であり、徳島県植物研究会の会長でもある木下覺氏に徳島県のフロラについての概説をしていただきました。

2003年11月8日（土）には徳島県立博物館で、室内研修を午後3時より行いました。まず、木下覺氏が「徳島県の植物相」という内容で講演しました。徳島県の気象の概説をした後に、剣山や蛇紋岩地などの地域ごとの景観の写真や、タヌキノシヨクダイやコブシモドキなどの徳島県を代表する植物の写真など180枚にもおよぶスライドで紹介していただきました。続いて小川が野外観察で見られる植物を紹介しました。

室内研修の後は、徳島駅近くの居酒屋で懇親会を開催しました。室内研修で紹介された植物について話が弾む中、阿部近一氏が大分県で開催された野外研修会に参加されたという話

を伺うことができました。私が数年前に徳島県にはバアソブがあるのか調べた時に、大分県産のバアソブの標本を阿部氏が採られており、それと比較することにより、博物館に収蔵している標本のうち徳島県産のものでバアソブと同定されているものは、ツルニンジンの誤認であることが明らかになりました。その際、なぜ阿部氏は大分に行かれたのか不思議だったのですが、この野外研修会で採集されたものであることがわかりその疑問が氷解しました。そして、知らず知らずのうちに研修会の恩恵を被っていたことを知り、研修会の意義を再認識しました。

翌11月9日(日)は野外研修のため、徳島駅前に午前8時に集合しました。参加者の車に分乗し、目的地へと車を走らせました。参加者は31名で次のとおりです。中村建爾(千葉県)、中村僉雄、長谷川義人(神奈川県)、内藤宇佐彦(静岡県)、長谷部光泰、吉田國二(愛知県)、須賀瑛文(岐阜県)、渡部壽子(滋賀県)、権藤啓子(京都府)、山脇和也(三重県)、岡崎純子一家、織田二郎、田中光彦、藤井伸二夫妻(大阪府)、山本修平(和歌山県)、中村元、橋本光政(兵庫県)、田中昭彦(鳥取県)、脇本進(広島県)、茨木靖、小川誠、木下覺、谷覚、田淵武樹、中村喜代治、真鍋邦男(徳島県)、栢岡珠美、田邊牧(高知県)。

#### 観察地1：那賀川町中島

中島は県内で第2の河川である那賀川の河口部に位置します。この河川敷には塩沼湿地が発達しており、ウラギクやハマサジなどの絶滅危惧種が生育していました。また、ハマゼリ、ホソバノハマアカザ、イソヤマテンツキ、ヒメヨモギなども見られました。

#### 観察地2：鷲敷町氷柱観音

氷柱観音はナカガワノギクとシマカンギクの雑種であるワジキギクのタイプロカリティです。ナカガワノギクは那賀川とその支流、日和佐川に生える徳島県固有のキク属です。リュウノウギク( $2n=18$ )に似ていますが、葉が溪流沿い植物の特徴である流線型をしており、染色体数も $2n=36$ と異なっています。氷柱観音周辺では河川の岩場にナカガワノギク、その上側に雑種、さらに上部にシマカンギクが生育しており、その様子を観察しました。

#### 観察地3：相生町虻ヶ淵

那賀川は県内随一の多雨地域を流れており、虻ヶ淵周辺の岩場ではキシツツジ、アオヤギバナ、ヤシャゼンマイなどのさまざまな溪流沿い植物がみられました。また、カワラハンノキ、タチゲキハギ、リンドウ、イブキシダ、アキノタムラソウ、ウメバチソウなども生育していました。なかでもトサシモツケは徳島県的那賀川、勝浦川の周辺と高知県の四万十川に分布が限られ、また四国の東部と西部に隔離分布しています。また、溪流沿いは、まさに種分化の舞台であり、分類学的な再検討が必要な植物もいくつかあります。岩場ではイワバノギクと呼ばれているシオン属の植物が白い花を咲かせていましたが、正式な記載はされておらず、学名は裸名のままです。また、ナガバシャジンだと言われているツリガネニンジン属の植物は溪流沿いに特異的に出てきますので再検討が必要です。時間が押していましたが、そうした植物を見ながらあわただし



研修会の様子

く昼食を取り、後ろ髪を引かれる思いで現地を後にしました。

観察地4：日和佐町外ノ牟井ノ浜

太平洋に面した日和佐町の外ノ牟井ノ浜の海岸では、シオギクが咲いていました。シオギクは徳島県と高知県の海岸にしかみられないもので、舌状花弁が無い少し変わったキク属です。参加者の一人が神奈川県産のイソギクを持ってきてくれましたので、雨の中熱心に比較していました。また、アコウやタイキンギク、アゼトウナ、ツワブキ、ハマアザミ、ハマナタナメ、キキョウラン、トベラ、ウバメガシなども生育していました。

前日の天気予報では降水確率が50%に達しており、雨を覚悟していましたが、最後の観察地では降られたものの他では天気が持ってくれましたので、無事に研修会を終えることができました。きっと参加者の用意してくださったおまじないが効いたのでしょう。時間がないので文字道理長距離を走り回ったために十分に植物を観察できなかったと感じられたかもしれません。そうお感じになられたら、高速バスに飛び乗って再び徳島に来てください。時間の許す限りご案内さしあげます。

最後に、準備不足や不慣れな点があり、十分なお世話ができなかったことをお詫びいたします。また、木下覺氏をはじめとする「みどりくらぶ」会員の皆様にはご協力をいただき感謝いたします。

## 野外研修会に参加して

京都市在住 権藤啓子

どんより曇り空の下、ウラギクの大きな薄紫色の花は幻想的に美しかった。林道でタニジャコウソウが群生していたのには驚いた。私はジャコウソウしか見たことが無かった。那賀川の川原でアオヤギバナ、イワバノギク、ホソバシャジンなどの貴重な溪流沿い植物の花はとても可愛かった。日和佐の海岸では傘をさしての観察となったが、アコ



ナカガワノギク

ウ、タイキンギク、シオギク、ヒメアブラススキなども私には珍しく、濡れるのも忘れて夢中で観察した。徳島でしか見られないナカガワノギクやワジキギクなど、溪流沿いに生きる貴重な植物の数々を満喫することができた。それぞれが環境に適応して棲み分け、子孫を必死で残して行こうとしている。その生命力にいじらしささえ感じ、感動する。これらの可憐な植物たちが、人間の身勝手に、消えてしまうことがないように願いつつ、徳島を後にした。小雨は降り続けていたが、楽しい充実した一日だった。



イワバノギク

色々気配り頂き、お世話下さった小川誠様、木下覺様はじめ、地元の皆様、ありがとうございました。

## 寄稿 I : 井上健さんがやり残した仕事

九州大学 矢原徹一

井上健さんが急逝された。健さんとは、大学院時代以来、植物分類学の近代化、植物繁殖生態学の開拓、植物レッドデータブックの編集などを通じて、張り合いながらも、協力しあってきた。年は私より上だが、大学院の学年では同期であり、私にとっては、齒に衣をきせず批判的意見を言ってもらえる、信頼のできる友だった。昨年からは、私が7年間つとめた絶滅危惧植物問題専門委員会の委員長を引き継いで、植物レッドデータブック見直し調査という大事業の指揮をとっていただいていた。この仕事については、健さんが精力的にこなしてくださっていたので、私はすっかり安心して、環境省植物目録（通称グリーンリスト）の改訂作業など、他の仕事に精を出していた。今回、健さんの急逝にともない、再び委員長を引き受け、健さんが築いてくれた方針・計画に沿って、植物レッドデータブック見直し調査に取り組むことになった。各委員や、各都道府県の調査員の方々の協力を得て、ぜひともこの事業を完成させなければならないが、健さんを失った痛手は正直に言って大きい。日が経つにつれ、健さんがいてくれたらという思いが募っている。

健さんに委員長をバトンタッチしたおかげで進んだ仕事の一つに、『絶滅危惧植物図鑑』の監修作業がある。永田芳男さんの写真と撮影記に、専門家による植物解説を掲載したこの本は、山と溪谷社から、近々刊行される。ラン科を中心に、かなり多くの種の植物解説の執筆を健さんをお願いした。健さんがサハリンに出発する直前に、井上さんの原稿について、最後のやりとりをした。『絶滅危惧植物図鑑』の学名は、グリーンリスト改訂版に従ったので、ラン科のいくつかの属は細分されており、属の新しい和名が必要だった。健さんから、*Pecteilis*をサギソウ属、*Habenaria*はミズトンボ属とすることなどの返事をいただいたのが、7月18日。これが健さんからの最後のメールになった。『絶滅危惧植物図鑑』のあとがきに、「健さんにこの本を捧げたい」と書くことになるとは、夢にも思わなかった。

健さんは、横田昌嗣さんと共著で、ラン科図鑑の出版を準備されていた。幸いこちらも、原稿は完成し、ゲラ刷りが出ている段階だった。先日、集中講義に招かれて、琉球大学の横田研究室を訪問したので、できるだけ早く出版にこぎつけていただけるよう、お願いしてきた。健さんは、ラン科図鑑の出版のために、日本産ラン科植物についての文献を網羅的にコピーし、属ごとに分類したファイルを作られていた。このファイルについては、奥様のご了解を得て、横田さんにお届けした。

10月4日には信州大学を訪問し、佐藤利幸学科主任の了解を得て健さんの部屋に入り、未発表の原稿などを探させていただいた。健さんは、仕事をきちんとまとめる人だったので、未発表の論文は、そう多くはない。しかし、大きな仕事として、スミレ属の分子系統に関する論文が未発表のままだった。健さんのことだから、きっと草稿を用意していたに違いないと考え、コンピュータ中のファイルを検索したところ、草稿・データ・データを解析した結果をまとめたファイルフォルダがすぐに見つかった。健さんの指導

で研究を進めた藤原さんとも連絡がとれたので、できるだけ早い機会に出版できるよう、お手伝いしたいと考えている。

夜には、佐藤さんとともに、健さんのご自宅に伺い、健さんが残された図書の生かし方について、奥様と相談した。奥様は、「売り払って散逸させるより、どこかにまとめて閲覧できるようにし、みなさんに活用していただけるなら、ぜひそうしたい」というご希望だったので、その方向で私が受け入れ先を探すことになった。ただし、10月20日までは、大学の研究室を空けなければならないという事情があったため、松本市内のコンテナルームを借りて、とりあえずそこに図書に移すことにした。その後、東大小石川植物園の邑田仁さんと相談し、小石川植物園に図書を収蔵し、「井上文庫」として後世に残していただけることになった。11月1日には、松本を再訪し、コンテナハウスで、小石川植物園に贈る図書を選ぶ作業を行った。選んだ図書は、段ボール26箱分にのぼった。ラン科の専門書のコレクションをはじめ、貴重な文献も少なくない。寄贈手続きと整理が済んで、公開の運びとなった暁には、ぜひ皆様に活用していただきたいと願っている。

## 寄稿 II : フィールド事故について

### I. サハリン海外調査と死亡事故

北海道大学 高橋英樹

サハリンにおける海外調査で、井上さんの死亡事故(7月28日午後7時、現地時間は日本時間より2時間進んでいる)がおきた。ここでは事故後におこったさまざまなでき事について、記録する。ロシア・サハリンでの事故なので、他の国では違う事情もあるだろうが、大まかには同じようなことを処理しなければならないだろう。

まず事故にあって電線下に倒れている井上さんを湿地から道路まで、キャンプマットに載せて運ぶ必要があった。高圧電線は地上近くまでたわんでいたのも、この時に2次災害がおこらなくてよかったと今更のように思う。死亡確認を現場に来た救急車の医師にしてもらう。これはオハ市に近かったので来れたと思う。町から離れた所ならどうなっていたか。しかし救急車では遺体は運んでもらえなかった。警察が来るのを待つが、これは大変長く感じられた。2時間近く待たせよう。警察の車で遺体は安置所に運ばれる。現場にいた日本人隊員は警察で事情聴取を受け、供述調書を取られる。一人一人の行動を順を追って説明する。これには調査に同行した英語通訳の女子学生があたった。このため一人の調書を書き上げるのにも時間を要する。深夜に及んだところで、ユジノサハリンスク(以下ユジノ)の日本総領事館から電話連絡が入った。現地警察が知らせたもので、ここで領事に事態を説明し、この事実はすぐに井上さんが所属する信州大学に連絡された。供述調書は現地の警察官による手書きのロシア語で、日本人には内容を再確認することはできないが、一人一人サインをする。すでに翌日になっていたと思うが、深夜にオハ市内の小さなホテルに連れて行ってもらって宿泊した。



ロシア側研究者からは調査の続行を打診されたが、調査は中止することを決め日本人は全員遺体とともに帰国する事とした。考え方の異なる彼らに我々の行動を説明するのは難しかったが、最後は諒解してくれた。

翌29日ホテルの電話からユジノの領事館あてに何度も電話をかけたが通じない。オハ市内では特定の場所(警察、郵便局、大企業のオフィスなど)からでないとし外通話ができなかった。航空会社のオフィスで電話を借り、やっと総領事館と連絡がつく。現場に再度集まり、警察と検察とをまじえて、現場検証をおこなう。現場には既に電力会社の社員が来ており「現場検証をするために電気を止める」という説明だったが、実際には倒れかかっていた電柱を現場検証前に直してしまった。幸いなことに前日の事故後、現場写真を撮っていたため、このフィルムを検察に提出する。フィルムはリバーサルなのでサハリンですぐに現像できると思えないがとにかく渡した。また現場がすでに改変されており、前日の警察での供述と異なっているため、もう一度現場で検察に実況説明する調書をとられる。これは英語で慎重に作製することを促され、さらに通訳によるロシア語での書類作成も求められ、かなりの時間を要した。検察庁での再度の説明があり、検死を経ないと遺体搬送の証明書をもらえないとのことであった。日本総領事との連絡が再度でき、ご遺族がユジノまで来られるとの事。航空会社に行き、予定していた調査用ヘリコプターのチャーターをキャンセルし、市内郵便局の国際通話でやっと自分の大学に連絡する。

30日は朝一番で町の葬儀屋チェルナヤローザ(黒いバラ)に行く。長方形の華美でない木製の棺を作ってもらおう。注文があってから作り始める。さらに飛行機で遺体を搬送するには、特別のジंकボックス(亜鉛板でできた箱)に棺を入れる必要がある。亜鉛板の箱は、衛生上の問題と武器密輸を防ぐために必要とのことだった。オハではこの箱を作れる職人は一人しかいない、ということで現地研究者サビロフ博士に必死になって職人を確保してもらった。この箱の製作が間に合わないと、週2便しかない明日のユジノ行きの便で運ぶことができなくなってしまう。ジंकボックスについては、当初総領事館からは特別の許可書があれば、なくて大丈夫との電話だったので作製を一度は断ったのだが、結局はこの許可証はとれず作ってもらうことになった。

死亡証明書、検死証明書、貨物証明書などが必要で、検察庁(ロシアでの正確な警察-検察制度は分からないが)で交渉する。日本人のパスポートは英語で記載されており、これをロシア語に翻訳するのに、正式に認められているザックスという登録局でやる必要があるとのことである。このようなやり取りをしているところに、ユジノから副領事が到着してくれ、以後の交渉は飛躍的に進展するようになった。ところでオハ市内に外国人が3日以上滞在する場合は、登録する必要があった。ところが事故があって足止めを食っている間にこの3日目に入っており、突然「なぜ登録をしていない」とロシア当局者が怒鳴り始めたのには困った。この間に検死所に行って、きれいな服を渡し、着替えを依頼した。

夕方、農業機械の修理工場だという大きな工場の一角で、ジंकボックスは作られていた。そこにチェルナヤローザのバスで井上さんの棺が運び込まれ、ジंकボックスに納めて溶接した。溶接の際には警官の立ち会いも必要だった。これを翌日飛行機でユジノまで搬送する。遺体搬送には6名分の飛行機代が必要だった。夏休みということもあり、飛行機は大変混ん

でいて全員分の切符がとれず、一部隊員は遺体とともに飛行機でユジノへ、残りは車でノグリキまで南下しそこから夜行列車でユジノに向かうこととした。

31日、飛行機組はオハからユジノ行きの飛行機で出た。これも機体の到着遅れ等でユジノには夕方到着し、ユジノまで来られていた遺族の方と面会できた。列車組はノグリキ駅まで車で4時間半、すでに切符は無かったが交渉の末何とか夜行列車に乗せてもらうことができた。

8月1日早朝、ユジノで全員が合流できた。すぐにユジノの空港まで行き、午前中には函館空港に到着した。遺体は東京までの飛行機便で搬送され、松本での8月2日の御通夜、3日のお葬式の日程に間に合った。ほっとしたのもつかの間、この後には科研の後始末が待ち受けていた。

大学には、まず現認書の提出が必要だった。これは信州大学で公務災害申請の必要もあり、我々の事情説明を書類の形で作製してくれたので、これをそのまま提出することができた。ただこの公務災害の申請には、信州大学事務の方も大変苦労されたようだ。私にも再三にわたって細かい事実確認があった。

大学事務からは、科研の出張を途中で中止したので(8月10日まで予定のところ、8月1日に帰国)、残りの出張旅費を返還しろとの連絡がきた。驚いたことに当初は、事故死した翌日からのロシアでの滞在費4日分も合わせて返却せよということだった。その期間はすでに調査ではない、という判断だったようである。日本人隊員は全部で4名だったので、1日分だけでもかなりの額になる。これについては事故後は現場検証や遺体搬送のために忙殺されたとはいえ、キャンプにも立ち寄り、標本整理も適宜行っていたことを説明して、やっと了解してもらった。それでもほぼ10日分の滞在費返還が必要だった。当初予定の3週間分の調査費用は調査の最初にまとめてサビロフ博士に渡していた。慌しく帰ってくる中で、献身的に手配してくれる博士から、残りの調査費用を返せとはとても言えない。結局、4名分の未調査日数分の返却分現金を工面し返却期限まで返納した。

現地研究者や日本総領事館、北大や信州大のおかげで、日本側で予定されていたお葬式の日程に間に合って帰れたことについては、当初はある程度の達成感もあった。しかし時間がたつに連れ、井上さんを失った空虚感が広がる。

海外調査での死亡事故は、当人にとって大きな事件であることは当然だが、残された者にとっても大変なことで調査の遂行自体も大きな打撃を受ける。学会の皆さんにも大きな心配をかけてしまった。二度と海外調査での死亡事故はおこらないようにと祈るとともに、日本や世界の植物相成立史の解明のためには、これからも海外学術調査の継続が必要であることを理解いただきたい。

## II. フィールドワークの心得

京都大学大学院理学研究科植物学教室 村上哲明

先日、井上健さん(信州大学理学部教授)がサハリンでのフィールドワーク中に事故で亡くなりました。井上さんは私がまだ学部4年生だったとき、私を生まれて初めてのフィールドワーク(井上さんが自分の博士論文のためにやっていた八丈島でのツレサギソウ属植物とその送粉者のガの調査のお手伝いだった)に連れて行ってくれた先輩だった。また、1998年に私が現在所属している京都大学で院生2人のフィールドワーク中の自動車転落事故があったときには、井上さんは直後の生態学会の大会で「フィールドワークの心得」という自由集会も企画してくださった。このように井上さんは、フィールドワークにおける安全確保にも高い関心をもっていた人だった。その井上さんがフィールドで事故死してしまったことは残念でならない。井上さんは、生前、「フィールドでの事故は避けられないものですが、フィールドでの事故の事例や対処の仕方を後輩に伝えることにより、事故の生じる確率を最小にする努力をする必要があるでしょう。都会に育ち、大学院に入ってフィールドワークを始めた人には、野外における危険の体験が少ないような気がします。」とメイリングリストEVOLVEでも語っておられたのである。私の原稿が、フィールドワークをこれから本格的に始めようとする若い人たちに安全確保について考えてもらうきっかけとなれば幸いである。それは井上さんの遺志にもそうことになると思うからである。

さて、私に対してはシダ植物を分子解析する研究者という印象をもっておられる方も少なからずおられるようである。しかし、私自身が研究者として一番誇りに思っていることは、これまで20カ国を超える世界中の熱帯地域でフィールドワークをしてきて、そのフィールドで興味深い植物材料と研究課題を自ら見つけ出して植物分類学の研究をしてきたことである。しかし、私は大学で野生植物の研究を始める前は、フィールドワークはおろか旅行さえほとんどしたことがないような学生だった。私は、井上さんを始め、岩槻邦男先生、加藤雅啓さん、矢原徹一さん、邑田仁さんなどからフィールドワークのノウハウを教わり、また、自身でもフィールドでいくつもの危険に出会い、それを(運良く?)乗り越えながら、フィールドワークの方法を学んできた。もちろん、私は冒険家ではないので、危険に身をさらしたことは自慢話では断じてなく、ただただ深く反省している。まず、私自身のフィールドでの危険体験からはじめて、私が自分の院生達にも語っているフィールドワークの心得をお話したいと思う。

私のフィールドワークでの危険体験というと、私にとって最初の海外調査だった1988年の中国雲南省での調査を私は即座に思い出す。それは私にとってすべてが初めての体験の海外調査であり、当時、エネルギーが有り余っていた私は、たいそう張り切っていた。別の言い方をすれば気分的にかなり浮かれていたと思う。雲南省に大理石で有名な古都・大理がある。そこにそびえる海拔4000mの点蒼山という高山のちょうど大理からみて裏側に照葉樹林が良く残っているヤンピという場所があった。そこに調査に行って2日目ぐらいのことだったと思う。私は珍しいシダ植物を求めて、20m程の滝の上で石の上を飛び移りながら採集していた。ところが不用意にジャンプしたら、コケの生えた岩の上で滑って転んで、その

まま滝の上から転落しそうになった。当時 28 才だった私は、まだ反射神経も力もあったので、とっさに岩に強くしがみついた。手指の爪が 3 - 4 枚ほどはがれたが、それだけで命拾いをした。その時に調査隊の隊長だった加藤雅啓さん(現東京大学大学院理学系研究科教授)が飛んできて、「村上! もうちょっとで死ぬところやったぞ。フィールドでは絶対に不注意な行動したらあかん! 」と、まさに鬼のようなすごい形相で怒鳴られたのを今でも昨日のことに私は思い出す。その夜、宿に帰ってからも、フィールドで常に事故を起こさないように注意し続けることがいかに大切か、一度事故を起こせばどれだけ他の人に迷惑をかけることになるかを懇々とお説教された。加藤さんと海外で一緒に本格的なフィールド調査をしたのは、今までのところあれ 1 回きりである。しかし、私は今でもフィールドに出ると時々あの時の加藤さんの怖い顔が頭に浮かぶ。おかげで、以後、フィールドに出ても浮かれるようなことは全く無くなった。やはり冷静に自分の身の安全に注意を払い続けることが何より大切だと私はこの時痛感したからである。あれから 15 年、私が世界の色々な場所で無事フィールドワークをして来れたのは、逆にこの危機体験があったからかもしれないと私は思っている。京大に移ってきてからは私も院生達から先生と呼ばれる身分になった。私の研究グループの特徴は、野外での調査データと実験室での解析を組み合わせて研究をすることなので、院生はすべてフィールドワークも活発に行っている。自分の指導している学生が初めて本格的なフィールドワークに出かけるときには、材料採集計画をまっとうすることや研究成果をあげることよりも、自分の安全に気を配ることの方がはるかに大切であることを自分の体験談も交えて私は語るようにしている。

中国雲南省には、その後何度も調査に行ったが、滝からの転落ほどは危機度が高くなかったものの、1992 年にもやはり遭難の危機に遭遇したことがある。その日は、ヤンピから点蒼山の頂上近くまで登って、頂上付近のシャクナゲ林を調査しようということになった。天気も良くて、点蒼山の尾根にたどり着いたのが午後 2 時頃だった。ガイドは、そこから尾根沿いに進めば 20 分ほどで点蒼山の頂上に到着し、頂上からはもっと歩きやすい下山ルートがあるので、それを下山しようと提案した。ところが、私達ではシャクナゲがハイマツのように生い茂った林の中は遅々とした速度でしか進めない。その間に体力を消耗してしまった日本人の隊員もいて、頂上にたどり着いたのはなんと夕方の 5 時すぎだった。夕方の 7 時ごろには暗くなる。私達は暗くなり始めた中、下山したのであるが、日本人隊員が 4 人もいながら私達は誰もライトをもっていなかった。日が暮れると山の中はさすがに真っ暗である。下山ルートはずっと開けた草地の中を走っているの、大きな危険はないとはいえ、本当にゆっくりゆっくりとしか歩けなかった。誰か 1 人でも懐中電灯をもっていたら、全く状況が違っていただのである。下から救助隊がライトをもって登ってくれたので助かったが、キャンプに戻ったのは、夜の 11 時ごろだった。この日は、幸運なことにずっと晴れていてくれたので良かったが、夕立でも来ていたらもっと大変だったことだろう。やはり、フィールドワークをするときは、最低でも懐中電灯くらいはもっているべきだと思った。それ以後、私はマグライト、スイス・アーミーナイフ、100 円ライターを一つのビニール袋に入れて、野外調査に行くときは必ずもっていくようにしている。また、雨具は防寒具にもなるわけで、晴れていても必ずもっていくようになった。この程度の注意さえ、払っていなかったことも

私はこの時、大いに反省した。フィールドでは、やはり余裕をもった計画で臨むことが大切である。ぎりぎりの山行をしながら調査しようとするのは、自ら身を危険にさらすようなものである。また、万一、フィールドで夜を明かすことになってしまった場合に備えて身を守るための最低限のものくらいは常に携帯すべきなのである。

もう一つ、フィールドワークで注意しなければいけないのが、自動車事故である。先にも述べたが、私の所属している京都大学でも院生のフィールド調査中の痛ましい事故があった。かくいう私も、林道上で事故を起こしたことがある。修士2年の時、私はほとんどペーパードライバーだった状態で沖縄本島の与那演習林の林道にレンタカーを1人で運転して入り、下り坂でスリップして林に突っ込んだ痛い思い出がある。突っ込んだ先が、たまたま林道から1mほど下がっただけの林だったので、レンタカーはベコベコになったものの、私はかすり傷一つ負わなかった。でもあれが50m以上の高さの崖だったらと思うとぞっとする。車は完全に制御不能だったので、どこに突っ込むかは100%運の問題であった。私はそれ以後すっかり懲りて、院生時代は道路の舗装が切れると早々に車を降りて、片道2 - 3時間かかるうがかまわず歩くことにしていた。自動車の運転に慣れた現在では私も特に無理がないと判断すれば未舗装道路でも走っている。しかし、もしあなたが車幅感覚も確立していない初心者ドライバーだったら、かつての私同様、歩くあるいは自転車を使うことを強くお勧めする。未舗装道路の運転は、舗装道路よりはるかに難しく、下手をすると命に関わるトラブルに結びつく恐れが高いものであることを強く意識して欲しい。

さらに、京大院生の自動車転落事故の際、詳しい旅程表(目的地、調査地はもちろん、そこへ至るルートも含めてたものを)を研究室に残していってもらうことがいかに重要かということも私達は身に染みてわかることとなった。事故を起こした院生2人は、研究室に旅程表を残してくれていなかったため、行方不明らしいとなっても一体どこを探索してよいかわからなかったのである。途中で民宿などに宿泊をしている場合には、そこのおばさんにでも、その日の調査予定を言っておいてもらえれば、その夜に帰って来ないだけで異常に気づいてもらえるだろうし、探索に来た同僚にどこを探したらよいかも伝えられるだろう。しかし、テントや車中泊で調査・採集する場合には、毎日でも現況を同僚に伝えておいてくれないと、同僚が異常に気がついたときには1 - 2週間以上も経っていたという事になりかねない。研究室に定期連絡する頻度が高いほど同僚に早く異常に気づいてもらえ、搜索を開始してもらえるまでの時間が短くなる。というわけで、私も院生が1人でフィールドに出ると高頻度で現況報告をするように強く求めている。最近は、携帯電話でフィールドから毎日短い健在メールをおくってくる院生もいる。

最後にもう一度繰り返すが、研究材料より、研究成果より、何より「命」が大切なのである。事故を起こしてしまえば、どんな成果を上げていてもその調査は失敗である。皆さんも是非、注意を怠らないようにしてフィールドワークを行っていただきたい。

## 連絡員からときどき便り

### 植物と人便り・1・

東南アジア大陸部のエンセーテ

鹿児島大学総合研究博物館 落合雪野

2002年12月、ミャンマー、シャン州北部を旅行していたときのこと、国道3号線を走る車の窓から農家の庭畑をながめっていると、バナナによく似た、でもどこか違う、そんな植物が生えているのが見えた。草丈は2.5 mほど、偽茎が全体に白っぽく見えるほか、偽茎の基部がふくらんでいるものもある。葉もバナナに比べて、直立しているようだ。そのうち、うろこを重ねたような長い花序をみつけて、はたと気づいた。同じバショウ科のエンセーテ (*Ensete*) だったのである。

エンセーテは、シャン州北部のシーポウとムセーの間、標高1000 m前後に位置する集落の畑でひんぱんに観察された。エンセーテといえば、その1種 *E. ventricosum* が、エチオピア高地のアリ人によって、偽茎からでんぷんを集めて食料にしたり、繊維をとるなど、多目的に使われていることが知られている。シャン州のエンセーテは *E. glaucum* と思われるが、その利用法はつぎのようなものであった。

エンセーテを栽培しているチン人あるいは雲南省から移住した漢人の農民に聞いてみると、種子や実生を食用にしたり、偽茎をブタの飼料にしたりしているそうだ。繁殖には種子をまく、あるいは種子から自然に生じた実生を移植するといった方法がとられている。

いっぽう、ビルマ人の農業普及所職員によれば、エンセーテは砂金採りに使う植物だという。偽茎の表皮をはがすと、細かいひだがあられる。しかるべき川にこれをひたせば、ひだに砂金が引っかかる。だから、ビルマ語の名前は、「シュエ(金)・チン(探す)・ガッピョ(バナナ)」なのだそうだ。

ミャンマーのシャン州北部以外の場所では、いまのところエンセーテを見たことがない。シャン州北部は中国雲南省と国境を接し、古くから人やものが行き交ってきた地域である。その流れにのって、このエンセーテもミャンマーに越境してきたのだろうか。



農家の庭畑に生えるエンセーテ



エンセーテの花序

## コケ便り・1・

ゼニゴケの胞子体は一年中見られる？

千葉県立中央博物館 古木達郎

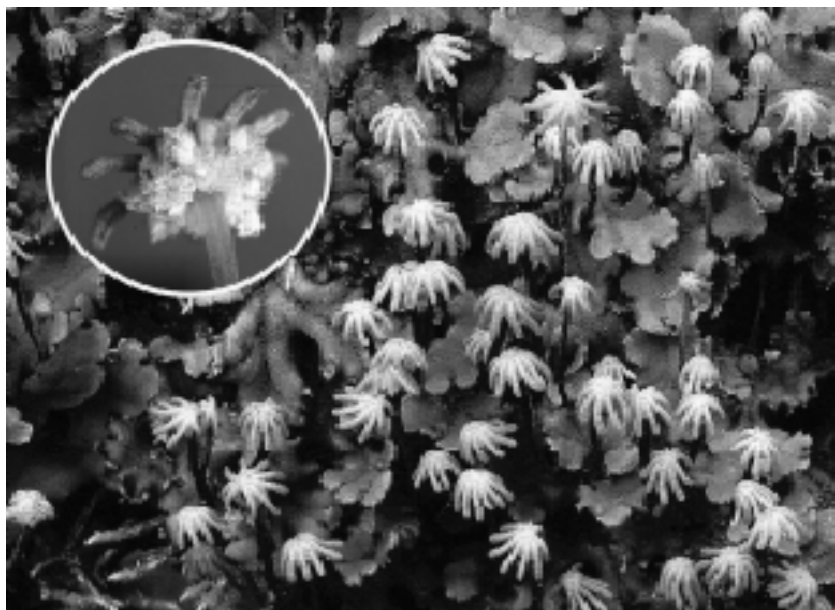
「ゼニゴケの胞子体は一年中見られる」という声を時々聞く。話を聞いてみると、雌器托を胞子体であると勘違いしているらしい。それにしても雌器托は一年中見られるのだろうか。

雌器托は、ゼニゴケ目だけに見られる構造で、造卵器のついているところが傘のような形に発達したものである。多くの属では、雌器托は、造卵器が受精することで発達する。しかし、ゼニゴケ属は例外で、造卵器が受精しなくても、雌器托は発達する。もちろん、受精するのは、他の属と同じように、雌器托が傘状に発達する前である。精子が傘の柄をよじ登ることはない。

また、多くの苔類では造卵器は、一年に1回しか形成されないが、ゼニゴケ(ゼニゴケ属の他の種は違う)は例外で、一年に2回、春と秋に形成され、その都度、雌器托が発達する。しかも、造卵器が受精した雌器托は長く残っていることが多い(受精しなかった雌器托は枯れやすい)ので、雌器托はほぼ一年中観察できる。

一方、苔類の胞子体は、成熟するまで、葉状体では包膜と偽花被(茎葉体では苞葉と花被)の中で保護されている。成熟すると晴れた日に胞子体の柄が伸長し、朔が外に出て裂けて、胞子は分散し、胞子体はしおれる。柄が伸長してからしおれるまで、1日とかからないことが多い。しかも一斉に成熟するので、胞子体を観察できる期間は、数日である。しかし、ゼニゴケでは、一組の包膜の中で複数(他の苔類では1個)の胞子体が次々に成熟する。従って、同じ雌器托で、長い間、胞子体を観察することができる。その長さは、関東の低地では、初夏と初冬の1ヶ月程度であり、一年中見られることはない。

ちなみに、ゼニゴケは、長日処理することで、造卵器と造精器の形成を誘導できることが知られている。もしかすると、電灯の下に生えているゼニゴケは、季節はずれに胞子体を形成するかもしれない。こんなゼニゴケがあれば、一年中胞子体が見られるだろう。



雌器托をつけたゼニゴケ。円内は、雌器托の傘の裏側で胞子体が見える。

## 会員消息

## 編集後記

井上先生の事故の関係で、先生と親しかった方や事故に直面された方などから原稿をいただきました。これから調査で野外に出る方に、少しでも役に立ってくれたらと思います。

今年は近畿・東海ではいやに暖かいまま秋が始まりましたが、ほかの地域でも寒かったり暑かったり、変な気候のようですね。皆さんの周りの自然はいかがでしょう。私個人にとっては、紅葉も今ひとつ、キノコも今ひとつ、ちょっと残念な秋です。冬を前に、風邪など引かないようお気をつけください。そして、原稿お待ちしております！

〒464-8601 名古屋市千種区不老町  
名古屋大学博物館  
西田佐知子  
電話：052-789-5764 ファックス：052-789-5896  
Email: nishida@num.nagoya-u.ac.jp

入会申込、住所変更、退会届、会費納入、購読申込などは下記へご連絡ください。

〒980-8578 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉  
東北大学大学院生命科学研究科生態システム生命科学専攻  
日本植物分類学会 横山潤（会計幹事）  
Phone:/Fax: 022-217-6689  
E-mail: jyokoyam@mail.cc.tohoku.ac.jp

会費：一般会員 5,000 円、学生会員 3,000 円、  
団体会員 8,000 円  
郵便振替 00120-9-41247

平成 15 (2003) 年 11 月 20 日印刷  
平成 15 (2003) 年 11 月 27 日発行

編集兼 名古屋市千種区不老町  
発行人 名古屋大学博物館  
西田佐知子

発行所 つくば市天久保 4-1-1  
国立科学博物館筑波実験植物園  
日本植物分類学会